

民俗芸能・近代と変化

—大学における民俗舞踊の指導について—

佐藤 雅子

1. 基本の考え方

大学の授業の中で民俗舞踊を指導しているが、民俗芸能でなく民俗舞踊と称しているのは理由がある。民俗芸能は踊りもあるが、太鼓や笛のお囃しだけのものもあるし演劇的なものもあって、必ずしも踊りがあるとは限らない。踊りを強調するためにも民俗舞踊という言葉を使用している。民俗とは生活と関わっているという意味に捉えている。

今、日本における舞踊は、大きく二つに分けて捉えられる。一つは、一般に古典舞踊といわれているもので、舞楽、能楽、歌舞伎の舞踊（所謂、邦舞、日舞）等である。もう一つは、地域に伝承されているもので、神楽、田楽、獅子舞、風流踊り、念仏踊り、民謡の踊り等であり、これらを民俗舞踊と捉えている。

日本の地域社会の中で生まれた民俗舞踊は、町や村で生活する人々のものであり、多くは信仰に支えられ、儀式や祭りとして踊られてきたものである。儀式や祭りは、近年簡略化されたり省略されたりしているが、豊作祈願、家内安全祈願、精霊の迎えや送り、神への鎮魂や感謝等の想いは今も人々の心の中に確実にあると考えられる。この想いは踊りにもこめられていて、人々の生活と共にある楽しく大切なものである。また、演じる人は特別な人ではなく、踊りで糧を得ているのではなく普通に暮らしている人である。日常の体を使って、非日常を演じているのである。

民俗舞踊を授業に取り入れているのは、この生活との一体感を大切に考えるからであり授業においては、この精神を大切に指導するようにしている。

2. 指導にあたって

現地への取材を原則にしている。祭りや踊りが伝承されている場へ出かけ、実際に見たり踊ったりし、感動したもの、ぜひ教えたいものを、踊りの特徴を捉えて指導するようにしている。民俗舞踊の背景について調べたり、土地の人と交流したりして、踊りの動きだけでなくその踊りのもっている背景や雰囲気をも同時に理解できることを意図している。しかし、土着の人にしか表せない世界もあり、保存会として踊っている訳でもないの、よそ者であることの謙虚さを忘れないように

気をつけて指導している。授業に取り入れ始めても、機会をみて取材を繰り返して、独りよがりにならないように注意している。

3. 授業の目的

①母国語を操るように、踊りもできるようになる
上手であるかどうかは別として、誰もが踊れるということが普通になることが望ましいと考えている。自分の体をコントロールすることは難しいけど、民俗舞踊の動きに同調していくことで自分の体の動きを感じることができる。踊って自分を表現できることの楽しさを実感させたい。

②自分の身体を通して、身近な生活や文化を見直すようになる

日本の民俗舞踊は、日本の風土に適した生活様式や労働における体の使い方を土台としている。挨拶は握手ではなくお辞儀であり、家の中では履物を脱ぐ、箸を使つての食事、茶道に見られるような物の取り扱い方、まねく時のおいでおいでの手、足腰を使った農作業、等々。そして何よりも踊りの衣装が決定する体の使い方と身のこなし。これらが土台となって踊りはできている。そこで、踊りにおいてどう動いたほうが美しいかを判断する基準は、同じ生活様式をしていれば誰にでも理解できることであるが、近年の生活様式の変化や労働の変化によって足腰は弱くなり身のこなしは無作法になってきているので、この点に配慮して指導し、動きの洗練をさせるようにしている。そのことで身近な生活や文化を見直すようにさせた。

③生涯学習へつなげる

教員養成の大学であるので、自らも踊りながら、子どもに教え、更に親や学校の周辺へ踊りの輪を広げられるように、いろいろな機会をつくるようにしている。

年度末には舞踊発表会を開催し、自分たちの発表だけでなく他の人たちの踊りもみることで互いに学習し合える場になっている。また子どもたちの賛助出演も出てきて良い勉強になっている。授業以外にも踊りたいと集まってきた学生や卒業生たちと単位の出ないゼミを開催し、それが「雅座」という踊りの一座を結成するに至っている。学外での出演等による広がりもできている。さらに大学で公開講座を開催し、一般市民への広がりもできて「幼児から大人まで、生涯、踊りを楽しみましょう！」のスローガンを掲げた生涯学習へと発展できている。